孝經說約

四

函番號 ユ1 號
種別 圖
購入番號 32,21 號
月日 月 日

919.5
338
Vol. 4

滋賀県立図書館
学校教育図書印

常山紀談巻之四目次

一 山崎長門守詫美越前守討死の事
一 中川重秀和田惟政を撃つの事
一 梶川弥三郎槙島先陣の事
一 山内一豊馬を買まつの事
一 奥平貞能父子帰降の事
一 東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事
一 渡邊守綱を鎗半藏といふの事
一 謙信草騎佐野城に入まつの事
一 大河内改房節義の事
一 鳥居強右衛門忠節の事

一 酒井忠次鴉巣城を乗取る事
一 長篠合戦の事
一 内藤四郎左衛門返答の事
一 多田久藏の事
一 佐久間信盛偽て勝頼へ降る事
一 二股城攻内藤櫻井功名の事
一 芦田信蕃二股城を退く事
一 信長公秋山伯耆を刑し給ふ事
一 松平忠次諏訪原城攻落し給ふ事
一 山内治大夫進に清三郎功を譲る事
一 長九郎左衛門能登國發向の事
一 越中守謙信月を賞せらるる事
一 信長公松永弾正を取しめ給ひし事
一 山口六郎左衛門奥田三河守高屋城を落る事
一 長坂釣閑跡部大炊邪佞の事
一 東照宮勝頼と大井川にて御對陣の事
一 栗田刑部幸若が舞所望の事 附 時田が首実験の事
一 岡田竹右衛見切の事
一 朝日千仏西郷伊豫を討つ事
一 菅沼定盈謄氣 附 山口五郎作後藤金助討死の事
一 岡嵜三郎君の御事
一 摂津國花隈城落る事

高天神落城仁科信盛戦死の事

常山紀談卷之四

備前國 湯浅新兵衛元禎 輯録

○天正元年江北の軍に朝倉敗しるバ信長の兵退きて急あり 名倉が士大将山法長門守詫美越前守柳瀬とてふく止を支へ〻〻とげまされて死に合せて討死する者多し山崎も大軍乃中まかけ入く討まとりり詫美矢立の硯とりなし詩一首を書て落ゆく者ゝ〻のこて加てゝかへしこまり

萬恨千悲有鬱然誰識今夜入黄泉故園更莫灑秋涙屍暴戰場唯是天

かく〻ゆく〻〻戦て討死しける其間〻義景のがれ得て越府

○ひさやまろ

○天正元年将軍義昭織田信長と不和の事出来て和田伊賀守惟政将軍より味方して摂津の國に陣を作り和田を始め〻〻誰某が首とり〻〻ん者には恩賞と書記して札を立らまゝ中川瀬兵衛重秀此時を荒木村重に属し〻〻るが此札を抜て和田が名に点をかけ自姓名をもゝ家に帰りかゝて又糸をぐれといひしふ書聊患る色なく内〻ゝ軍の門出祝〻〻まくとて羹すゝめ酒とり出しとり其夜子の刻ばかり伊賀ちがる首とりく来りて村重大きに驚きさいうでかくたやすく和田をゝ討ゝる我といふ事秀さんに明日必戦を決せられぞ討ゝ者かゝるべし用心

死むいのちを此夜の内にすてゝんにゝハ和田が首とり得つべし敵も此〻の合戦を大事にとひ淀河の浅深をふまゝんに惟政さる大将かり物見を出めむべし〻〻ぞ自ら来らんハ必定とりあつゝまゝ討とんぞおもとり又討死せバ多くの敵に中に入て大将の首やゝんとて討死ゝるとり人いゝんハ武名ハ朽ずとゝひさゝめ水をわたりたゝの岸の柳ゝげふゆゝうれてゝつ業北ゝく和田二陣にひゝくく出来る様ゝまざれ入終にゝうちとりて水中に飛入のゝまゝ抜て帰ぬとゝられバ人〻感ずあへる事大方ゝ〻〻ぞ

○天正元年信長霊陽院殿を宇治乃槙島の城に攻る時打しも雨ふて川水岸をひゝせり信長馬を水涯に駐ゝく昔に梶原

佐々木も鬼神にそなはるものといとゝ武者一騎川へ
うち入ゝ出るを見て梶川弥三郎高盛おくべし梶川討れ渉せ
と下知してそまつりうまを先にとうち入てとゝろゝ武戦乃
前に信長黒のうまを梶川に乗たりくゝる其時伝七梶川が志重
てゝ軍まいらんかゝんずる者ちりとあざ笑ひていとまつゞ果
しく其詞に甚ハざりきりあり

○山内土佐守一豊其ちゝめ織田家東國第一の後
馬ちりて安土に牽来てたゞ者あり織田家の士を
ゝ誠に無双の駿足なれど價あり貴ゝとて求むべき
人れくいゝづゝに為て一豊其比ハ猪右衛つといひ
しが此馬望に堪ゝられどもいかゝも叶ふべゝ所れば変

帰に身貧きなど口惜きまゝハちゝ一豊奉公の初にあつて
まかゝる馬に乗て屋形の前に打出べき扨ととひゝ言ゝれば
妻ちゝぐゝとせて其價ハいかゝぶりてうれと問黄金十両と
ゝていひ(ま)と答ゝ妻聞て仕ちゝどゝとひちゝんに其馬求め
給へ其料をバきちゝとて鏡の奩れ底よりとり出て
一豊が前にさゝ一朱ゝ大さおゝ所に此年ごろ身貧ゝく
て苦しき事のゝ多ゝりしに此金ありしもゝ世ハ人
強くも包ゝかひちゝん今此馬得ゝとハ思ひもよゝざりきと其ハ
悦び其ハ恨む表仰の上旨ゝとゝりてゝそれへ仕りちゝられ
ちゝハ此法家に家り時父此うゝみの下に入ちひくゝ仕ちゝこと
の常れちゝかめゝ用ふべゝぞ汝が夫乃一大事とあゝん時ふ

まゐらせよと戒め給ひきはまさバ家の興りも世の常な
れバ堪忍ても過ぬべし誠に今度京まで馬揃ひすべしと有れバ
此事ハ天下の見物なり君も又諸人の始なりとて馬召て見参
せさせ給ふらんとなれてこそ有れとて一豊悦ぶる限なく
頓て其馬求てくり程なく京まで揃ありし時打乗て出し
かバ信長大に驚き給ひいづれなるやとて事の由聞給ひ東國第
一の馬遥に見ゆる方にひきて来りしを空しく帰さんハ口をし
き事ぞとよそれに年比山内ハ久しく浪人してありしと聞
家も貧しかりしに求得るハ信長が家の恥をすゝぐる人
弓矢とる身の嗜みかくこそ有べき事やあると感じて是よ
り次第に用ひ給ひしとぞ

○天正元年三河作手築手の城主奥平監物貞勝入道々文が子
美作守貞能孫九八郎信昌皆勇氣ありしかバ人にまさりし
に近づきる道文ハ武田家に心をよせ勝頼の士大将甘利を作手の
本丸におきし奥平父子ハ外郭にあり信昌信玄の死しける事
をかくされるを悟て居しかバ又に　東照宮より本多豊後守
廣孝をもて帰降の事をすゝめらる信昌父と大父とにすゝめ
て密約をなされ武田家奥平か人質を出せよと下知せらる貞
能いかにもすべき謀なくて庶子千丸十三歳になりけるを名
屋甚次郎をそへて出しけるを　東照宮より不意に討べき様
を家臣共以て告あるに武田がもとにいやしく土屋右衛門直村
黒瀬に在けるが使を以て貞能を呼よせ彼是の検使城所

道壽も出向ひ二心あるやうなる処ゆゑ来られそうよ、祈ゆ
こそと詞をかくる矢能かゝる時は父子の間も疑ひ事世乃
あるべきなり能た愛子にて千丸を人ぢらに出へバ行れ子
細のなべやと強くいろあるれバいざ碁をうんとい貞能心
ちづうに碁をうち終て眠をして門外に出るを道壽又よび
かゞ湯漬飯を出れ矢能こゝを食するひまに道壽士を
門外に招ぎ待居まる貞能が士に向ひて人数逆あらいれ唯
今ゆきて由をいそぎれば奥平八郎うちにらひて更に
強くいなつなこれハ矢能ふよう武田方にていらるるもの
とも吾首をとゞる中ハ強くまちれと固くいひふくめ
きりをかくまぶりすれ矢能驚ゆり其衆一族打具して

退散一岩嵩に赴れバ松平主殿助伊忠本多豊後守廣孝
等　東照宮の仰を奉て出迎ひて滝山に引とりて

○天正二年四月　東照宮天野宮内左衛門景貫が大井の城を攻
させ給ふ時霖雨にて兵粮運送の仮よりて三倉ハ砦に引さ
ゆ給ふ事を天聖討て出給ふ高山光明の城くより
も出あひ田野大窪の住民も相加りてかゝりより鉄炮を
さしかけ声をなげて攻ふる後殿の人々ひきて討まを
ちらしめ給ひ　東照宮三倉にて酒召引返させ給へバ
ちや敵引ふりを玉井左右衛門殿ふが股を鉄炮にて
うゝ傷あるゝ故ちひて三倉にまゝ引れバ手負ふ
ひとゝ鉄炮のをとをあ中くとひしに軍をゝよ此馬

にのまで伴ひ帰るよりおりさせまひたり人々君の士を
いろいろせまで諫ぜざる者ありし大久保七郎右衛門忠世が同心
杉浦久蔵（一説勘左衛門久勝に作る）深手おひたりしに七郎右衛門馬より飛
おり是に乗て引しりぞけといふに久蔵うけざるの下り所
かなふまじ手負たる者ハいかに斗討まゐらするなにかあらん大将こそ人
此馬にめされまゐらする抱ハ八幡も照覧あれ乗まじいといへバ七郎右
衛門礼儀も所によるぞかく〳〵といへバ久蔵是非なく乗て生
大将をすて殺してハいかでせんとて辞ざれバ七郎右衛門いかられバ
馬をすゝむるよといひすてゝひらんとせる処に小二甚内（一説石上兎角）馳来
り七郎右衛門ハ早の此ふるぞといひて久蔵をひきたてゝ馬に
のせやがて七郎右衛門に走りまゐり七郎右衛門にハ兵藤弥

惣と犬といふ小者と三人おちまとて細道の崖を引退しけるに跡
より追来る者七郎右衛門をつきおとされ二人もつゞいて飛ける所に大己
らあげ持の蝶たさし指を持たるを投すてさるを敵見てあれをとる
んとする所を弥惣走まはりかゝぐりとらんとすれバ敵弥惣を
一刀切りけるに七郎右衛門とつてかへして敵三人討とりけり
東照宮剛将の下に弱兵なしと忠世を御賞美ありけるとぞ
○東照宮と武田の兵と大天龍にての戦に近藤傳次郎手おひく
渡辺半藏守綱をと見かけてあひたるぞ給まて退といふに心得る
とて手に提げたる首を投すてゝ傳次郎を肩にかけ三里ばかり
引退てたすけられバ　東照宮聞召味方一騎討るれバ敵
千騎の強をとりつるなり味方をたすけるハ七度の強を

合せるよりもさきに今より仔鎗まさ義といつべしと仰られ
ぎ後ゝ半義人ゝかゝりていとく佐次郎をわまたれバそなたも
りゝまに仕とゝてのけおわりをべきかゝゝ時ハ大ゝゝ者をてゝ体
かゝとてゝ刺殺して棄らゝぐゝ味方おれバゝて移ゝゝハな
うゝのゝとゝいひゝゝゝる

又一説永禄五年九月参河の八幡ゝて今川氏ゝと三河の軍
戦あゝゝく利あゝゝぐ二手ゝとゝられて引退敵ゝゝ追ゝゝ
半蔵ゝ源石川牧九郎ゝ合せ三度槍を合ゝ後ゝハ義
一人ゝ十度小及て小ゝゝゝゝて又三度槍を合ゝ矢田作十郎足
をゝゝゝ引ゝゝる拙ゝ義肩ゝひゝゝけて退ゝゝれゝ
ゝ鎗半蔵ゝ人ゝゝれゝゝゝゝ義弟を半十郎政綱

とゝゝ後彩五左衛ゝとゝゝ味方原の軍ゝ草鞋れ緒ゝゝけゝゝ
を下ゝ居て結びゝゝを半蔵いゝゝげども心ゝゝたむすゝ
引ゝれゝ兄の半義ゝ中ゝる剛の者ゝゝゝが半十郎がゝゝ
ぶゝゝ者ハつひゝゝゝと常ゝ語ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○天正二年北條氏政三万の兵をゝて佐野政綱をかゝ
謙信八千計ゝ兵をひきゝゝ後詰せゝれゝゝ城危ゝゝゝゝれゝ
遠信後ゝハゝれゝゝゝゝゝゝ士大ゝあゝゝゝれバ心やゝゝ佐野の
城ゝゝおぼつゝゝれ先ゝれハ城ゝかけ入て力をゝくなんとて物の
もゝぐゝゝゝゝ木綿の胴服をゝゝかゝゝ十文字の槍を横ゝ
僅ゝ十三騎ひき具ゝ氏政の陣ゝ前を馬を静ゝゝゝゝゝ佐野
乃城ゝ入ゝゝを氏政乃家兵ゝて夜又羅刹ゝハゝゝゝゝべし

まて恐まく近ぢく者もたゝ氏政圍をとゝく引退く
を謙信やゞて門をひらゝく多くゝども氏政一軍もせで引
ちりてさゝすり

○天正二年勝頼高天神の城を囲んと師を出し小笠原典八郎長
忠軍の目付大河内源三郎政房と相後して防ぎゝり　東照宮
後信を信長ふこハせゝ勝頼城の巽れ嶺ゝ陳ゝ大文字の旗
を中村の内公文といふ所ゝ立る後まで其地を大旗と称せ兵
粮竭士卒疲るまハ援兵を待ゝ姉川の戦功を捨させ
ふと怒て七月二日城を出て降参を軍れ目付大河内政房ハ
應政公の妾華陽院乃甥なり縁者ゝ降ゝざりゝゝバ小笠原
豈どゝて石の牢ゝ入置ゝゝ勝頼降ゝゝバ本領ふ倍ゝてこそ
行ゝゝと説せゝれども志を変ぜず勝頼怒て牢の口を鎖し政
房ゝゝゝゝゝ高天神落城ゝ及ぶまで八年れ間牢中ふ居
甲斐れ士横田甚五郎言ゝ夫郎ゝ来て在番せゝゝ大河内ら節
義を深く感ゝ弟ゝ祐ゝ祐ゝ祐んごろふいゝゝりたりかゝて　東照宮ら
天神を攻させゝひて天正九年三月廿二日の夜城乃守将冨沼
丹後真幸横田ふ郎尹松相木市ゝ糸昌朝巳下切て出岡
部ハ討死ゝ横田ハ切ぬけゝく甲府ゝ落ゝりゝ城落れバ
石川伯耆守数正城ゝ入て政房を捜ゝ牢中ゝ年久ゝく
有て足痿れバむゝろのせて　東照宮の御前ゝ出し多年
石れ牢ふゝゝ難厄いゝゝぞとて御涙を流され御ふづう
ら刀脇差黄八金をゝくゝらゝふ政房生ゝれゝ事を口惜く

とゝろあゝそれしらバ人〻敵のそうこと多〻事ハ小笠原ら
不義うゝ武田ゝ降参せ[illegible]ちれバ何方ゝのゞき出ぢさや
志ハ比類なきぢ記事なれバ生ちうと欲ゆるすなるくなを
まてなうゝわと口々ふいひくゞ杖も廿ゝ憤ゞ刺殺し
て肖空と稱せゞ仰ゝ[illegible]く尾張の津島北湯ゝ浴ゝ足の
瘻も愈くれバ遠州稗原の地を賜ゞ長久手ゝ戦ゝ討
死ゝくゝとそ

○天正三年勝頼奥平九八郎信昌ゞ三州長篠の城をかゝ攻る
東照宮援兵を織田家ゝこゝせゝひ後巻乃謀をめぐゝ
ゝ処ゝ城中粮米既ゝ尽んとせゝバ此旨を告をゝん為ゝ
居渠右兵衛勝商ゝ人命じて密ゝ城を出ゝ鳥居のゞき出ゝを
得バ向のかんゝうゞ嶺ゝ烟をあゞ[illegible]三日ゝて又かれ出ゝ
烟を両度あゞバ後援なゝとゝうゝ[illegible]べゝ三度あげあハ後援
なゝ[illegible]ゝれバ信昌鈴木金七郎を召居ゝて
て五月十四日の夜城ゝ西ある山の岩根をたゝひ川ゝ入ゝる
ゝ大聖川滋川の水底ゝ縄を張てなゝ子をかけゝまバ
通ゝ記やうもなゝ二人水練ゝ達者ゝて川の浅瀬ハゝく
ゝうつ小脇指を抽て川底を潜ゝ縄を切て通ゝ[illegible]バかゝく
とゝうゝを番の兵ハどもゝ[illegible]ゝ其中ゝ一人五月雨
ゝはゝゝ川をハ鮪の[illegible]ゝんといひゝれバさてやみぬ二
人ハ早滋の下度ゝとゝいゝ処ゝ上ゝかんゝうゞ嶺ゝて烟をあ
げ十五日ゝ岡崎ゝ系てゝの由を申ゝ信長生日

淵に忍ばせ置る者居ハ信昌尚心ゆかずやいらんちの仁
得て城に入るを見ばゆ後先にべき事審ふやさんとて引退
鈴木ハ信昌が父美作守貞能小告げと鳥居に言まとりを出
かんちゆうが嶺に上り相図の煙三度あげて後篠原といふ所に
さ忍入たりやとすゝゝ柵重ゝふりゝ砂をもて出入の人共
足あとゝ試改めゝハ中ゝ入ぬき拵ゝて出ゝひるを穴山共
ほの者ゝ付てけやゝて遂にかゝめられゝ勝頼道遥軒信
綱を以て子細を問ゝに色々共事の由をぞ共ゝへゝゝゝハ
勝頼ゝ共を呼て汝がいのち助さてくべゝ汝城際に往て伝
長ハ上方の軍にて此城の後先ひもとゝずといとゞ城兵降
参しぬゝゝ出ゝバ汝に厚く賞をんといたれゝゝバ居則心沿

いにて城門近くより後先として信長父子岡崎まできたり上
旗を出さゝ先陣ハ一の宮に陣せり徳川殿浜父子浜田まく
浜ゝを出られゝより此城運試開ん事掌の内にあるといひられば
甲州の者ども大に怒ゝたる居をひき連て勝頼にかくゝゝ世
大に怒て城に向て磔にしてゝゝゝゝ長篠にて徳
敗北して後信長を始め鳥居が無双の忠ゝ事を賞じ
作手に耳泉寺に懇に葬ゝまとりを

○勝頼長篠の城を囲攻ゝ事をげゝかりに信長　東
照宮と共に後巻にて軍評定の時酒井忠次すゝみ出今東
日ハそさより長篠の附城鴨巣へおりゝゝ攻破らば徳敵敗
北ゝゝゝとゝもいへぬゝに伝ゝあざ笑ひ汝ハ三河遠江の小せり

合ハ慣つまで大軍の計策ハ志ゝざりなりとて嘆らまてハ
忠次いそぎ刹ちて出るを見て信長　東照宮と佐々成政
きれるハ左兵尉ナレ処充然るべし又呼出さまてよりて酒井
側近く居より諫て曰く計ゝる裁きしも外ゝ洩せえん
うとて忠次いつとりて彼ゝ方ゝ池向て鴉巣を攻破
ひへていそれゝハ忠次承りて出んとする時又ひさこゞめ呼
ハ信長ゞ向ひ度ゝ方ゝあゝ武功を汝ゝ譲ゝ見とやれゝ
忠次大ゝいさゝて夜半計ゝ見ひもらゝぬ所ゝ出て武田兵
庫頭信実三枝勘解由和田兵部を始とゝあゝ討ゝ
火をかゝる煙を武田の軍兵顧て大ゝ勇氣抽て終ゝ敗北
北ゝ走りとなり此夜討ゝ天晴惣次郎ハ指物を持

さゝ戸田半平ハ道をとゝ夜あゝる事もけんとて指物を持ヤ
ゝゞ城を焼ゝる火のひり白日ハ如く天野戸田先を爭ひゝる
ゝ戸田ゞ銀の髑髏ゝさゝ抱かゝやゝゝるゝ人の目を驚
ゝり信長後ゝ酒井ゞ功を賞して汝ハ前ゝ眼有のゝふも飛ゞ
ゝ眼ゝ見とゝいとれゝゝバ忠次糸毋ゝて市ゝ終ゝ後を見
ゝるハゝゝゝとゝれバ信長笑て御の計たゞハゝゝる事を
賞せんとていひるゝとゝいとゝれバ忠次ゝ仰の面目を
ゝて退出ゝゝりゝ
長篠ゝて信長の先陣と旗本との間ゝ切とかゝ柵の木ひ
ゝく敗北ナれバ武田の猛兵敵ハゝゞゝゝゝゝ退ゝ柵ゝ木
ゝ形ゝゞゝゝゝを数千の鉄炮面ゝゝゝゝゝゝかれば

空矢なく中ゑて討ゝ者数をゝ引退とすれバ柵ゑを
出て付ゝ戦をいどめバ柵の中ゑ入てうちゝ勝頼の士
大将勇氣強くまとゝくとも打破るべき様なく皆的ゑなりて討
死〳〵ゑ

○同じ時徳川家の先陣を下知せゝて信長ゟ使来る内藤四郎
左衛門ゟ鉄砲ゟ主君ゟ先陣ゟ下知を他人ゑうゝ者ハい
なゝ内藤兼て左ゝ仕ゝゝ中れよとゝらくゝいひて
追かけ信長写て徳川家ゟ兵士数をゝ引退られ名
内藤を鳥井ゑ作まゝ行り然まゝゝ井ハ三形ヶ原ゑて
討死〳〵ゝれバ内藤の事なゝ

(一)同じ軍ゑ甲斐の士一人生どゝく信長の前ゑひさ来る躾小姓景
子のゝゝ帯をゝゝり信長名を問ゝゝ美濃の者多田久蔵と
名ゝ信長手を指て汝ハ伯父ゟ葬礼の時火車を斬ゝゝと
笑ゝ美濃尾張ゟ国ゝ我ゑ奉公せゝ
ゝやゝゝ結ゝ縄をゝゝ悪源太もかゝゝあらまゝゝ弓
箭ゝ弱ゟ恥なゝ事といゝれゝバ長谷川茂兵郎かゝゑ
ひさのけ縄をゝけバ多田ゟ記ゝ鎗を奪ゝり四人つ
き伏る長谷川そゝゝて首を切て信長ゑ出ゝゝゝゝ
ゝゝ信長深く惜ゝれゝ
一説赤地の唐おりの錦ゟ下帯をゝゝ士を生どゝ来る唯
者ゑ非じ名のれとゝゝゝ名のゝゝぶゝ雑人のゝゝ
かけて殺さん士なゝバ腹切せんといひゝゝ多田淡路

子たりといへ信長ゆゑて淡路と久義新義とて二人は
子なりしかいづまでと問るに小新藏たりとて勇士
なりとまうすけてとて有られば生ぜりと云る恥辱と
首を刎らるべしと云り信長は有て縄をとりて
門外に立りけるに捨をとりたりの者なつき殺さる
とりく遂に新義を切るしたり

○長篠合戦の前信長謀をめぐらし佐久間信盛より潛に
坂釣閑ぐりに使を遣し日比信長に恨る子細なり敵に
勝頼軍をすすめ戦はんとは其時信盛裏切して信長は
旗本へ俄に切かゝるべき旨をいひ送るならば釣閑悦ぶ
こゝをきばるとはゝゝぶで勝頼と一戦をすゝめる放馬塲

美濃信勝を始ゝ侍大将は軍評定しいひる事
ゝを勝敗悉く用ひずして楯なしと誓て進で軍すべきと決
部せゝまつゝば其後は諸大将陣ゝを捨ばりくるゝ
○天正三年六月　東照宮二股の城を攻る城主は依田下野守
幸成なり其子右衛門大夫幸致城を出て鳥羽山の下なる小
川を隔て防戦ふ内家弥次右衛門家長強弓はゝゝ
放ゝ射ゝゝ松平弥右衛忠長が子彦九郎敵に朱乃
てゝちん射さ把るをとんで味方も此さ把有られば
やりて敵の中へまぎれ入しを拒比奈弥兵衛一矢ゝて射伏さ
ゝ内藤太兵郎と縁者のゝゝみゝば引返して弥兵衛
弦射ゝ其ゝ弥兵衛が乗ゝる馬の鞍は前輪ゝりて鞍を

かけて射貫く弥兵衛が矛弥藏を生来て兄が屍をひき退んとするを二の矢ゆくゑも射倒し城兵二人は屍をゐるをけんどするを本多忠勝等進みかゝりて追ひ〻〻り城兵引退く中に二人を負てひきゐるを一人ゐるを櫻井荘之介勝次敵の首を一ツ取とりしゞ又すんで追ひ行　東照宮御覽せられ酒の四半の内〻和八樣井ゐるゞ〻〻除入すると仰られ是其時敵の手負を助くゐる者やゐ〻〻一の木戸揚錠門乃中に入を負ゐる者ハいまゞ半ゐ申ゐゐに徒次郎と云ふ手負ゐる者は足を やゐ〻〻三間計ひきゐ〻〻遂小甘首をゐる其時門内より勝次がさゝ和を折折ゐるゞ屍よかゝりゐゐゐゐとゐゞして

五六間計引とる時從者かゝいゞゞ又取て足〻さゝ和を とゐ〻て多羽山に陣り首をゐる　東照宮唯今の勇氣 比いゐゐゐさ誠に毎双と覺ゆゐゐ然まゞも元より後ハ ゐゐ〻〻今日はゞゞ〻深ゐゐゐゐゐゐゞゞとて遠州に て祿を增〻ゐ戸けりゐゐ彼從者も度々ゐゐゐゐゐて後 士ゐゐ〻〻内田彦右衛門といひゐゐり

○勝頼長篠敗北の後芦田常陸介信蕃二股の城をゐる三河の軍五月下旬ゐり此を攻る南方山に　東照宮御陣をゐゐ られ巽の方鳥羽山東を安倉口の山北ハ三千原口は山西を 和田島に向城をかゝらる信蕃固く守て十月小ゐりて 城をゐゐ〻〻田州に引入ゐゐ〻〻と傳頼承三下知せゐれども聞

入ざで勝頼自筆の書をとりて下知せられしかば十二月下旬より人質を出し廿三日城を渡さんと約せしが雨ふりくれば蓑笠にて人
若くんして翌廿六日天晴る後城をとりて二股の川を渡て
人質をとりかへ引とまるとり信蕃小勢にて久しくやり且城をとり
くれん作法ぞ〻くるとて沙汰ありて後終に徳川家に仕へ〻り

○天正三年信長美濃岩村の城を攻て秋山伯耆晴近を生どり
生ながら逆さに付といへとせられ〻り此ハ信長の姑遠山内
蔵助が妻にて遠山ハ甘ぞ岩村にまをを秋山遠山乃七家と
称せしハ〻と和平にて引とり元亀二年信長ハ加勢の
士三十五騎を殺害し城を奪とりて内蔵助が後室を已が妻
にまを遠山ハ是より若ち病死し其嗣信長の男信坊

丸を甲州へ送りやり岩村を居城とせしかば信長怒ゆくゆく
事深くかくハせられ〻り秋山口をくもたれ〻るを
ハ信長に縁類のもの〻こゝ〻にかくせ〻事毎念ゆ
て歯をかゝ信長ハ未をたゝ罵て七八日ぞうみて死し
ゆり信長信州法華寺ゆく兵粮つゝまゝる時いろ〻の
小袖をゝ〻〻女房一人来り懐より錦の袋に入たる茶入
をゝり出し是を信長にたせ申ハ〻ハ〻ハ〻おし
まゝんとい〻信長是を出て茶入をハ石に当てこなゝ砕き刀
を抽てかの女房を切〻ぞられ〻り此秋山が妻にて信長ハ
をぞなり

○天正三年八月　東照宮諏訪原の城を攻〻せ〻〻此城ハ甲州

馬場美濃守氏勝が城制の法にそむき給ひし名言
城なりといへども城兵力弱く廿四日の夜城を棄て小山田
城に逃落ぬ　東照宮此地は高天神に往来の要路
遠州田中持船の敵と大井川一筋を隔ぬ勝敗必隙を伺
ふべし誰か此に在て城をもり敵を防ぐべきと仰有け
る小松平左近忠次すゝみ出身不肖なれども此城をもり
やぶらんと申る御感あり松平乃姓を賜ハり御諱の字
を下され松平周防守康親とやせ給ひ時より乃事なり
勝頼が暴悪殿の紂王に似たりとて攻入て打ちば
きさきを諏訪の原に城を牧野乃城と改められしと
なり

○諏訪の原に城を甲州より攻来るに合戦あり松平康重康親の子
の士山内治大夫進士清三郎山崎惣左衛門三人殿しりぞき山
内は精兵にて射拂て引退く時矢さきあり山縣
源四郎打進むる時進士清三郎矢一筋を山内になげやと
しかば山内ふゝと止まりて射るに志村金左衛門が胸板を射通し
後に松の木に射付けさりそれより物ともせず山縣矢
を康重に送りて強弓精兵無雙なりとぞほめける
扨康重其矢に進士が姓名を彫付けるを見て賞する処
に是を山内が射申しかくそれとかに復山内と呼出しく
ちゝに清三郎が射るを見てそれとめづらしと陶
康重両人に感状をとらせ世に人あ人と今の孟之反也

いひあをり

○天正五年畠山修理大夫義隆毒殺せらるゝ家臣七尾の城に據て信長に屬し能登大に乱まるれば義隆の伯父上杉弥五郎義春越後に在く是を聞謙信に かくと告謙信即師を出し義春先陣して七尾の城を攻おとす此時長九郎左衛門重連七尾にて畠山が長臣温井三宅を殺さる重連が弟恩光寺使僧となりて信長に此由をやせば柴田勝家前田利家羽柴秀吉滝川一益氏家丹羽長秀長谷川ト全等四万計にて去八月五日加州手取川を渉て永鳴に陣取り謙信は能登一州悉く旗下につゝ八月朔日兵を引て加州に長が一族の首七ツ倉部柳瀬の間に濱小竿ひ波しかけ並べ札を書て立られ其松任の城主蕪木右兵衛大夫と和平し信長著陣を待松任に軍評定の一戦をぐべしとあくまでもあり七尾既に落て謙信これを打向まてもり爰にて合戦無益なりとて引退くべしと信長此陣をいろめき立恩光寺人に首を見すれば名のみかく面貌異なり上方の軍おちし来るを多謀を以て長一族の首をいつたり設さるなれん能州をすて松任に在ハ怪詰防ん為あるべしといふをすてさせたまひ即夜戌の剣に及で恩光寺柴田木下が陣に移先に味方一同に敗北せるをいろをんてきぐりてやせ事をを七つの首ハ吾父兄弟にて告せ事ハ爰にて合戦

べうにて信長引かへさるる恩光寺是非一軍とゝのへども少
入を恩光寺ハ後信長の命にて還俗し長九郎左衛門連龍と
いひしハ此人なり連龍父兄の吊合戦を志し信長に下知を
請越前に赴て柴田に属きるを儲永越前の大橋に
札を立長九郎左衛門能州に發向を立身を志て輩ハ是ぶ
被官にしるも来るべしと書しうれば相あつまる士八十餘
人天正七年三月二日能州穴水の城に入旧好の者共池辺
より百人に及べり上杉より有坂備中を七尾に おたをるゞ
長曽檢見与十郎を大将にして ゝ せ戦ふに長敗北し
て危うしを谷大学討死し長やゝ引やうに紀
州士鈴木因幡初長に ゝ みて北越に居て今能州に来

る長有坂を和平し従者ハ陸長ハ舩小く有坂ゞ方に来ふ
ゝ の使に鈴木 ゝ 長を殺害ゝ色あり長に従
へる石黒大膳井久留ケ意合田民部木脇小介の ゝ
り石黒今七尾にゆゝバ必害ふにいん舩中にて鈴木を殺して
退くゞ ゝ すゝむ長冥て汝が志悦ゞし拙ども陸より田
る家人皆殺されん吾獨生べき義なくして七尾に也法
道寺に入く遂ふ有坂に對面を殺害ゝきいたされども有
坂事故なく長を帰しゝ松川兵部今日長を討めし
残多くにおゝせて討んとゝ有坂ゞ入を長ハ石動山に
かゝ越中に赴く石黒敵ゝせ来らんに ゝ ふる者なくバ口惜
さゝり姓名を書戸ハりれ敵を支て討死せんといへども長汝

をすて殺し吾獨生て何の面目あんといふ石黒いひがひなく
事をゆるすものゝ如なを遂られゝば吾子孫をうしなうて生
まゝれといふまゝ七尾の商来て敵打ゝるといふ長ハ石動
山ゝかゝり石黒ハ物ハ具して待ども敵来らざれバ打ゝり
乗付ゝく共ゝ越中ゝ赴き神保安藝守氏春のもふ居ゝ
後長ハ前田の家ゝ仕へゝく浅井なゝ武功ありを此人
なり長恨又恕庵と称しゝり

○謙信越中ゝて秋夜出征をあつめ月を賞して詩ありー

露滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。越山並得能州景。
任他家郷念遠征

○東照宮信長小作對面の時松永弾正久秀かゝゝゝ伝長
此老翁ハ世人のなゝゝゝ事ミツなゝゝ者なり将軍を弑
ゝ奉ゝ又已ゞ主君の三好を殺し南都ハ大佛殿を焚ゝ
松永と申者なりと申されゝゝ松永汗をながして赤面せり
東照宮後長臣等を召て御物語ゝゝ時此事を仰出
られ先年信長金崎を引退ゝ時所ゝゝ一揆起て危うし
小朽木ゞ浅井と一味を捨ひ進退ゝハまりゝに松永伝長
ゝ告て朽木ゝ方へ案内して味方ゝ引付べし朽木同心せば
人ゝを出ゝく却具して御迎ひ参べし若又帰ゝ者
らずバ事なゝゝして朽木と刺ちゞゝく死ゝとゝ
りめられよといひく朽木ゞ館ゝ赴き事なく人ゝを
出ゝ様ゝとゝ信長朽木谷ゝかゝりて引かゝゝゝ

と仰らるゝと雖

○松永弾正大弼山口六郎四郎奥田三河守高屋の城を守るを信長攻らるゝ城中力尽く一方をかけ破て落んとせしを山口風雨の夜鉄炮をあつる東の門北手へ向て攻ふうちせりまぎれはや打て出ることさわだるゝ其ひまを以て西の門を開き一図にかけ出撃破て落ゆきたり

○謙信卒して天正六年三月九日養子上杉三郎景虎改政虎実ハ北条氏康の子く猶子喜平治景勝遺跡を争ふ景虎縁あるを武田勝頼に援兵を乞む猶予兵を出し此時景勝謀て猶予の寵臣長坂釣閑跡部大炊助に使者を送て勝頼小黄金一万両竜臣小二千両宛を與へて加勢をこふ両寵臣猶予を勧て政虎を放され是より諸士勝頼をうゝみるゝ終に勝頼の妹智木曽左馬頭儀昌信長に従て勝頼に叛く猶予これを討んとて軍を信州諏訪原に陣して小山田左兵衛信茂もこれに従て汗宿監物友綱に送る

汗馬忽々兵革辰。東西戦鼓轟邊恨。世上乱逆依何起。
只是黄金五百鈞。
砂金を一朱もとゝめぬ時は恥をかく敷小今うれ

友綱和韻

甲越和親堅約辰。黄金媒嫁誠神恨。信臣屠盡平安國。
可惜家名換万鈞。
虎狼をかくハものゝうハをんて世乃寂滅をそゝも金の諸ゆえ

両寵に弥邪義を行て武田家滅亡せり

○天正七年九月　東照宮勝頼と大井川のいろゝて川を隔て對陣しおはしける時に大木川上まで川に沿び流る其音波に ひゞきて ちとゞゝくまうゝばすハや孫授衣討ふ事 ゝとさらにぞ きゝ ゝて ゝ牧野半右衛門に先陣をまづめよと作まゝゝうバ牧野池行く行ゝさわぎいやは旗本もさゝらだりぞとくちづまりいへと呼ばれバ愈ゝぞれきちりかゝゝふゝゝに大久保七郎右衛門忠世馳来り勝頼ゝ家ゝゝて御旗本ハ物の具ゝゝゝ敵を待かけゝる

に行ゝて先陣の人ゝかゝまで終ゝ行ゝゝ武田日ゝ勝

ゝゝゝゝとくまゝれゝと罵られバ是に恥ゝれ

て程なくさわだもまづゝりゝを

一説持船の城を攻おゝゝせられ保ちゝゝゝて林火すて

ゝゝ此時勝頼沼津の城普請ゝいゝの上にて此烟をゝゝ

まゝゝ北条家ゝ軍を後ゝゝく九月廿日　東照宮ゝ御

陣ふ打向ひ富士川をおゝゝ　東照宮客戦ハ危しと

や御思慮ゝゝん兵をかくして大井川の伊呂をゝゝせ

たゝゝゝべきふ定させられゝゝ俄に惣軍ゝゝゝ

まづゝゝゝ牧野半右衛門制止まゝゝ孫さわぎしゝ

七郎右衛門忠世御旗本ふ大挑燈をゝくさゝあげさせ士

をつけおきくゝゝゝゝゝゝまで動くゝゝゝゝいひふくを

先陣に行く御旗なハ二の身を討んとてゝゝゝゝゝ

其證ハ所の火は動あをゝとゆられバ是ようてさぶ
まりるをバやゞてはり沖り先陣ハ[illegible]さぶまりて敵を待
体なり以後先陣の人々ハ見ふるゞ[illegible]ひられバこれも
まりぶづまりるをといへり

○東照宮高天神の城をかこゝせ給ひ柵を付て固くもりゝ給
らる城中後詰を乞ども勝頼出ず糧盡るゝ栗田刑部使を
もゝて幸若ゞ舞を一曲所望是を今生の忘ひ出とせんとや
るゝ　東照宮家ゝ召やはゝもいひゝるよとて幸若ゞ
高館を舞せゝる栗田ゞ最愛の小性時田鶴千世といひし
者ゝ結紙やゝの物をもゝてゝ出ゝて幸若ゞ贈をあるゝ世ゝ
落城乃時時田討死しるを首をやゝられども女の首なる

ゞゝと人ゝ疑へり　東照宮家ゝ召まき眼をひゝるゝ女
なゝバ白眼なるゞゝと仰有れバひゝいてゝ黒眼あ
ゝ又幸若忠四郎も高館を離るゝ時ゝ[illegible]ゝ
時田ゞ首ゝ之をなり

○天正八年七月　東照宮田中の城を攻させ給ひ八幡山ゝ陣
陣なるゝ苅田なるゝ[illegible]ゝ攻敗せんとて甲州をお
出る松平康親ゞ士岡田竹右衛門元次此ごろ夕立洪水なゝ
ゝ時なり大井川ハ一夜ゝ水出ゝ渉ゝ[illegible]勝頼血氣の
勇将ゝてゝへバ係ゝ押よせ来ゝるゝ苅田終ゝ[illegible]
川を渉て吾城かへされ給ゝとやハ　東照宮尤か
ゝゝし川を渉ゝ兵ををさめゝ果して其夜大雨ゞ

〜く大井川水出きり

○田中の城を攻ら〜時西郷伊豫とゝ剛の者足軽を引具し度々打て出雲を破るまゝバ　東照宮誰ゝ〜西郷を うつぶ者ハと仰有れども答る人なし　其夜菅沼大膳ゞ陳ふ人〜あつまり〜此事をいひ出し〜ふ菅沼ゞ小性弟 日千仞後ハ丹後とやに十八歳なりしがすゝみ出討〜べしといふ夢 沼聞て汝寝言をいつやとゝひ〜必定討取申さんといふゞ はばかれ古兵も軍ゝ〜る西々ゝ〜り半やゝ〜く討人半 ゝひもよ〜ばそこ立されと罵るまゝバかゝ〜りいやとよ 千仞ゞはゝ〜半ゝ〜ひなゝみ〜ゝ〜ゝ末世〜ゝわゝ者ゝ ゝとゝへなゞゝゝゝり千仞あゝを待ゝゝ西々ゞ首挽て

糸〜ん抱をゝ獨言〜〜〜退ゝゝりかゝて夜深て菅沼ゞ出 せ〜鉄炮をゝり出〜暁陣屋をひそゝに出岡部と藤枝の間 なる竹林ゝかゝ〜居〜ゝ夜あゝ〜西郷馬ゝ乗足軽引具 〜て来る　東照宮ハ岡部のかゝ〜乃小山ゝ陣〜ておいせゝゞ 敵又出〜ゝと仰ゝ〜ゝ千仞鉄炮ゞゝあすゝ西々を 馬ゝり打落〜走ゝ出ゝ首をゝりかけゝりてかゝ〜ゝ 東照宮ゝゝれ剛の者よゝとゝめさせゝバ是ゝり千仞ゞ名 高く冥ゝゝり

○天正二年勝頼兵を出して菅沼新八郎定盈ゞ新ゝかゝ城を攻んゝゝ定盈ゞ一族をゝ導ゝ〜く不ゝゝ〜ゝゝ謀をゝり出ゝ者みゝて告ゝ〜せゝり■月九九日の曙ゝ定盈

が士ども大敵和田嶺本宮坂二筋より攻られて攻来れども退
まてとゝまを聞て一軍もせず逃落ん事弓矢の恥か
ましい人々永禄年中今川家より攻し時ハ西尾孫九郎元
正加勢ゝ仕今多ゝぬ士卒打ちるまゝよく城を出く
運をひゝくのそこゝて然るをらんといへども定盈兵を出し
て敵の拵をせむ山縣が軍競来る由告るゝ定盈則
ゆたくうゝひをうゝて出ゝ足軽の頭山口五郎作をひて誅
るまゝハ則より出手を洗ゝ又湯をのて口をすゝぐ
常のごゝくきひく諫まゝハ南れ郭より退きるゝ途中ハ
てゝまゝ等ゝ伏所より火をかけざる事後より敵より嘲らるべし
誰ゝハ帰まて城より火をかけ又日比愛ゝたる鷹を携ゝ来る

ゝたとゝひもゝぬより中山興六十八歳なるゝ引ゝ城より
どり火をかけ奪を臂ハて出ゝりゝ定盈ハ宇利を経て
西郷へ赴ゝるゝ城をゝひゝ与六海倉洞まで退きるゝハ
興六が一族後苑金助追ゝけ来てきれくも敵より後を見
ゝまゝ綱をかけゝるまゝハ興六馬ひきゝゝ乗むゝと組
て既より金助が首をとゝんとせゝより多嶺の士あまたおちるゝ
ゝりて後より討まゝりゝ山口ハ定盈が後殿ゝて主従三騎素
綯瀬を渡るゝ小敵追来る山口引返ゝて敵にゝゝ射伏ゝ
まゝゝ馬疲まゝれバ敵ハ近く鍬田村より吉祥山より赴
く敵ハ追ゝけ来まゝバ苑ゝふ射ゝゝりるゝ馬動ゝり
ゝゝ乗ゝゝて歩ゝちより山より箭二筋ハを

残まり菅沼刑部塩津傳助追つめられバ射されども中らず
指添を油断手裏剣にうつ刑部が頭上をうちかすりさま
山口も終日そこにて討死し廿墓今に有といふ
○岡崎三郎君天正七年二股の城にて自殺おはしまさるゝ
信長ゝ叛逆の志有て勝頼ゝ内通し二股ゝ城へ甲斐
乃兵を引入ぎさとの三郎謀ありゝ此事ハ酒井左衛門尉ゝ
く存知ゝと告やされしゝ事起まくはひゝ死を賜ハ
まぬ
忠次を信長召寄て三郎君ゝ北の方より告やされし
十二条の悪事をあげて忠次ゝ問まゝ小忠次ゝより前
三郎君の侍女おぬうとゝひし美人をひそかに已が妾と
事ゝよりて三郎君憤深ゝ及ぶ
ゝとゝ
又一説ゝ佐久間右衛門尉信盛三河ゝ参まゝ東照
宮御馳走ゝ三郎君をめされ御対面ゝ小佐久
間黄八ゝ綿をかぶり居まゝを三郎君ひさ奪ひ
てなげ棄無礼ありと怒らせ給ふ　東照宮怒給ふ
ゝ小三郎君ゝ信長の聟ゝて有まゝと仰らま
しゝ佐久間無礼を謝しやせしが是も信長ゝ讒言せし
故ゝ御ゝ三郎君ハ勇氣世くやしくきハめて拙ゝ
くおはしやしく軍ゝ臨て氣色かゝり髪毛も逆ゝ
ぎくゝ立ゝを　東照宮御覧して摩利志天の像ゝ

似よりと仰有しと哉
平岩七之助親吉ハ三郎君の傅なりしかバ臣が諫申さゞる罪
を以て死刑に行ひ首を信長におくり三郎君をバ獄におしこめ
おいて時を待給ハれと申たるを　東照宮汝が忠心ハ誠によ
べき詞も非ずもよく察せよ武勇わたしてすぐれりしを
子を殺すハ忍ざるの至なり汝が首を信長におくりても既に
吾家の長臣酒井が信長におくりでけしくいひつると覚され
ざなりし家へ入らまでし汝を殺さバ恥の上に恥損の上に損といふ
是なるべしと仰られたるとぞ其後年経て忠次目を煩ひて
久しく引こもりたりしが御前に出て年老ぬ子を不便にし
せよと労まへと申あげるを聞召信康生て有ならバかぞうり心
を労まじきに汝も子の不便なる事をしりたるが怪しかと
仰られしかバ言なくして退出したりとなり又ある時幸若大夫が
満仲を舞たりしを御覧ありて満仲の舞ハ大久保ハ好ミ見ず
いと仰られしかバ忠世もひこもりたりしにこれハ三郎君を忠世が
御あづかりし時定て武具したるまゝにて片かげの山林に身
をひそめなんと思ひたるにさいハなかりたる三郎君の御
涙ながら悔させ給ふよしありて御詞にハ出されども事にふれて殺
年の後も愁傷の色あらはれさせ給ひたると哉
○摂州花隈の城ハ荒木摂津守村重が一族荒木志摩守元清
こもれりし天正八年信長の命にて付城をかまへ花隈の北諏
訪が嶺にハ護國公西の方金剛寺山にハ士大将伊木清兵衛

忠次森寺清左衛つ忠勝南の方生田の森ハ護國公の嫡子勝
九郎之助ハ[illegible]ひぬいづまの花限より六七町計を隔さり
三月二日城より兵を出し勝九郎廿二歳にて組討の功名あり
國清公ハ時古新と申し[illegible]十六騎にておいせ[illegible]も組討ゆく
[illegible]護國公敵五人自[illegible]伊木清兵衛秋田志
摩堀与左衛つ芳賀五郎右衛つ石黒武左衛つ佐橋武右衛つ
後藤市兵衛波多野弥藏等[illegible]戦ひく退崩にあ
夜護國公森寺政右衛つを呼で城中へ忍入よくと来まと命
せ[illegible]森寺ハ時梶浦勘兵衛も打つまんとに森寺今夜の
物見ハ大事なり相俱んと叶べ[illegible]と云梶浦出て立
[illegible]事[illegible]く帰ゆき自書をもつて外なりと申く

帰ゆき体にてぐれバうつまつり陳と城との間に小さ
坂あり城中より武者二人鎗を提げ来る出あひ二人とも
討とり首ハ草の中に匿し[illegible]ぶ又あ
さより出て匿し[illegible]る首を持帰実検に入城中のさ沙を
申せハ護國公ハ城ハ攻とるとすいふしてうハ
此功を賞ゆき但梶浦ハ行てもそやと問ふ梶浦兼
[illegible]て政右衛つ仰られしを切りげ[illegible]て[illegible]に護國公近
習の人をいけていひつる事を立聞し且軍法を破ると怒
[illegible]其時森寺只今泰と仰を承はして[illegible]の
[illegible]ハ助兵衛が処を[illegible]せうひ[illegible]とせバ護國
公さてやうなんと仰るかくて七月二日に及て生田の森ハ

南へ馬の茅苅り雑人出るを城中より兵を伏置て退ち
しりぞと生田の森に付城より是を見て彷九郎馬上より徐
を横へ出たゞけ者たゝて池向ふ梶浦兵七河崎忠三郎大
陽寺左平次旗田左近日置清十郎ゑど追つゞき声を石
はして切かゝる竹村喜左衛門乾平右衛門長谷川彦左衛門鎗を
き伏射る渕本弥兵衛八四寸角の柱に一丈作りかゝを打ふ
をて敵をたゝき代相戦ふ金剛寺山の伊木森寺も大手の
軍をげーををて搦手より乗こんとちりよする城より
野口与一兵衛といへる者半町ばかりおて出防るゝ堅口も討
死すれば城ぎハへ切つもる大手の戦より寄手多く討ま危か
をれば引ゆきんと護國公梶浦より使をかけらるれバ却を紙

唯今あゞんとせば孫ゞれ行ゝ為ゞ作ゝさゞゞハ鉄炮の
数少く覚つゝに俄よきゝるハ搦手より大手へ救来かん
政右衛つよかゝめ手へ切つをを乗こみやゞ孤ゞ小只今大
手の味方を引ゝゝバ敵搦手へきハ政右衛討死をべし
とゝに護國公左ゝりとくゆきをて見来まを仰られしゝは
勘兵衛池つけて右ゝ此るなりとゝ政右衛よくこそ
ゝゝよ急入ゞ大手を攻られ此と又とゝ勘兵衛此場
を見すて城ハ口をゝれども使の仰重られハをてかけ
帰をかゝゝやせハ護國公毎二毎三不乗破まを下知せゝ
勘兵衛ハ城六乃必突て出ゞ門脇より出ん城せゝ搦手
ゝも伊木木ゝ先を入門を破りて攻入ゝ森

寺ハ古くの春案内ハよく見こうて門を破る透間よりか
の屏を踰敵陰よりて突れども飛こみて丈夫に討とり出
梶浦ゞ者ども〻ぬくかゝめてゝ防ぐ兵少りてまゝ〻ば攻入く
火をかけゝり城兵も大手の門をおひ〻ひ切て出る勘兵衛
行ゝて鎗を合て城兵爰を切ぬけんと死狂ひ成て戦ひるを
寄手かゝめてより攻入ゝるゞ敵の後へ切てかゝりしゝば城兵後
を失ひして敗北せり兵庫の築城ゝ雑賀孫一郎花隈の加
勢ゝくみゝるを伊木森寺先陣ゝをおゝせ攻落に此
時湊川ゝて勝九郎五輪作右衛門と剛の者と鎗を合に森
寺政右衛門も地付れハ作右衛門引ゝて退ゝるゝ五輪の
物を見ハかれるに此ゝ勝人へまわるゝすゝとも

て川へ飛こみて逃ゝ落ゝ黒田官兵ゝ白き五輪の形を深さ
るなりゝと称り信長ゝ猪九郎國清公小馬をまわゝせ
ゝ護國公今度の軍ゝ目前ゝて各功名ゝたるあれバ
明ゝ見届ぬ中ゝ独て梶浦ゞ決死鎗を合せゝよりも忙し
き場ゝよくゝこゝて察ゝれとくかへにゝ賞美有るゝぞ
○天正十年勝頼の弟仁科五郎信盛高遠の城をもゝ織田信
忠僧を使ゝて勝頼の滅ん半近ゝ城を出
らるゝ者といひ送ゝるゝまゝ〻ば信盛怒て見ゝもせで僧
乃耳鼻をそいで追出に信忠ゝ攻よゝてゝおゝよ
きびゝ攻ゝ城兵ゝ降ゝ討ゝ信盛小山田備中
渡邊金大夫照春日河内ゝ原隼人今福安左衛門諏訪荘左

巳下十八人十二間ゟ七間の廣間ゟ火をちらして戦ふ
信忠浅黄金襴のちらけて屏ゟあゞ〳〵梧桐の枝ゟそらつゝ
下ゑせ〳〵を目ゟかけ七八度打てか〳〵る此時三十五六歳計
の女房の緋おどしの物ゝ具着眉尖刀を提げ諏訪並右衛門つま
妻なりと名乗り七八人ちゞ伏て自害しゝゟ信盛を始め
て死狂ゟ切てまはれど攻あぐみ〳〵る内森武蔵守長可屋根
板引破らせ鉄炮を打こゝろゝまバ信盛床の上ゟつゞり
腹切て腸をたゝんでか〳〵紙ゟ擲ち倒き死に其血痕後
までゝとゝ小山田巳下も自害しゝり信盛此時十九
歳なり信忠のそりたくれしゝ梧桐ゟ鎗刀のつとひゝと付
て大廣間の天井も柱も塗太刀ゝにとありて血ゟそゝ
ぎ所なゝ庭ゟ残まる雪ゟ血かゝりて紫となるまでと我

常山紀談巻之四終